
IS <インフィニット・ストラトス> ～黒鉄の剣は誰がために～

又左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> 黒鉄の剣は誰がために

【Nコード】

N5558W

【作者名】

又左

【あらすじ】

「——僕は、大切な人にいつも笑顔でいてほしいから戦う」

そう言って顔を上げると確かに微笑んではいたが——その瞳には、強い闘志の炎が垣間見えた。

去年、爆発的な人気となったIS <インフィニット・ストラトス>の二次創作です。作者は原作を初版から買って読んでいます。

機械の設定が好物なので何回一から読み直したことか。ですから、恐らくは設定などに綻びはないと思います。

ただ、細かすぎる設定を使って疑問を浮かばせる可能性はありますが。

それと、主人公は一夏たちとは同い年ではありませんのでご了承を。

では、IS <インフィニット・ストラトス> <黒鉄の剣は誰がために> 始まります。

キャラクター紹介（1）

【名前】

たちばな
立花 玲児

【性別】

男

【年齢】

24歳

【出身】

日本

【所属】

IS学園職員（用務員兼警備員）

【容姿】

男にしておくにはもったいない艶のある黒髪で、穏やかだが確かな意志を感じさせる黒色の瞳を持つ。爽やかを絵に描いたような端正な顔立ちをしている。

【性格】

穏やかで人当たりが良く紳土的、さらに闊達で気配り上手なため面倒見のいいお兄さん。また、何かとそつなくこなしてしまう天才肌。相手に対して良いと思ったことを馬鹿正直に口に出して褒めてしまう。そのため、無意識の内に女性の心を掴んでしまうことが多い。いざ危機に直面すれば、己の全てを賭けて大切な人や物を守る。

【趣味】

刀剣、家事全般（特に料理）

【特技】

剣術、家事全般

とりあえずは、これだけになります。後から徐々に増やしていきます。では、IS <インフィニット・ストラトス> 黒鉄の剣は誰がために 始まります。

始まりは突然に

——春先の柔らかな日差しが優しく降り注ぎ、小鳥たちが可愛らしくさえずるお昼前。

「……ここか」

正門の前でポケットから携帯電話を取り出し、地図を確認するとまたポケットにしまい込む。

今の服装は、上下ともに黒いスーツにネクタイとお約束をきちんと着こなしている。片手にはかばんもあるからもう完璧。

（やっぱり、推奨されてる物を使うのが一番。あつ、でも結局は自分に合うものが一番だけど）

そんなことを考えながら僕は新生活の大きな一步を踏み出した。

僕が踏み出す先はそう——世界にただ一つしかない公立IS学園だ。

「——すごいなあ。さすが、世界中から生徒を受け入れるだけはある。まあ、公立だけど正確には国立みたいなものだから当たり前か」

学園の中を見学（という名の散歩）しながら、敷地内の様子に僕

は驚きっぱなしだ。

「中の様子も、学園案内でしか見たことなかったからなあ。いざ目の前にすると全然違う。やっぱり、『百聞は一見に如かず』かな」

同じことわざの「論より証拠」も似てるかな？ そんな有り難い言葉を生み出した中国四千年の歴史ってすごい。

「あ、あのー」

うわあ。散歩好きの癖が祟っちゃったか。ついに声をかけられちゃった。

「あ、はい。何ですか？」

ここは慌てず騒がず素直に答える。もしここで不審者扱いされて教職員の方々が出て来たら、確実に危ない。……命とか。

「どのような御用件でしょうか？ もし場所が分からないのであれば、私がご案内します」

そう親切な提案をしてくれた目の前の女性は、身長がやや低めで服は全体的に余裕があるのかだぼっとしていた。加えて、かけている黒縁眼鏡もずれたままになっている。

（……さっき、自分に合う物が一番とか考えてたけど。これ、誰かに奨められたのかな？）

僕は女性を見て、そう思わずにはいられなかった。いや、決して他意はなくてただ疑問に思ったただけなんだけどね。

「ええっと……」

「えっ!？ あっ、はい!! 案内よろしくお願いします」

「そうですか。では、こちらへ」

笑顔でそう促されて僕はすぐさま女性の後を着いていく。だがその時、なぜだか背筋が一瞬だけ凍り付くような感覚を覚えた。

——後に、僕はこの時の悪寒が決して気のせいではなかったことを思い知らされる。

不幸の前兆

僕は今、前を歩く女性——山田真耶先生と話をしながら案内してもらっている。

「でも、珍しいですよ。用務員での採用だなんて」

「たまたま、学園長とお近づきになってその時に提案してくださったんですよ。それに、僕が教師になったって何の役にも立ちませんよ」

「そ、そんなことないです!! 立花さんは、その、アレですから……」

山田先生はもじもじしながら僕と足元を交互に何度も見ている。

「アレって何ですか？」

「えっと、その……アレって言うのは……キャッ!!」

「あっ!!」

足元がおろそかになっていたのか、小さな段差に山田先生はつまづいた。その瞬間に僕は踏み出して倒れないように支える——。

「だ、大丈夫ですか？」

——つもりだったけど、なぜか中途半端なお姫様抱っこになった。反応がほんのちよっとだけ遅れたせいだ。

「は、はい……。大丈夫です……」

山田先生は齒切れ悪そうに答えると、顔を赤らめてそっぽを向く。そりゃそうだよね。好きでもない男に抱かれてるんだもん。

「あ、あの……。もう、大丈夫ですから……」

「あ……。すみません」

山田先生がそう言ったので、失礼がないように体から手を離れた。新生活の初めから女の人に嫌われるだなんて……。不幸だ。

「あ、あのですね……。立花さん、私……」

「山田先生。こんな所で何をしているんだ？」

「ひゃあ!？」

山田先生が意を決して何か話そうとした瞬間、誰かが話しかけてきた。

「珍しいな。山田先生がこんな所で油を売っているだなんて」

「あ、油なんて売っていません!!」

そんな冗談を言いながら一人の女性が近付いてくる。……。あれ? この人、どこかで……。

「私はこの人を学園長の所へ案内する所だったんです!!」

「この人？——ッ！？」

山田先生にそう言われて僕を見た瞬間、その女性は大きく両目を見開いた。

「もしかして、ち……」

「山田先生！！ この方は私が学園長の元まで連れていきます！！」

「えっ！？ でも……」

「いいですね？」

「は、はい……」

女性は凄みのある笑顔で山田先生を言いくるめて（というか脅し）退散させた。

「——さて。まずは説明してもらおうか？ 玲児」

——この日から、僕の新生活はとんでもない苦労の連続へと変貌していく。

僕の幼なじみは凶暴です

「――さて。まずは説明してもらおうか？　玲児」

――何がどうなってるの？　僕の頭は完全に思考が停止している。

今、目の前にいるのは久方ぶりの再会になる小学生からの幼なじみ。

本名は織斑千冬。第一世代型ISの操縦者にして元日本代表。おまけに各国の操縦者が集まる公式大会で、一度も負けなし。当時は世界最強とまで言われた――のだけど、ある日を境に引退して消息不明。っていうか、学校の先生やってたんだ。以外だなあ……。

「……玲児、お前また失礼なこと考えてないか？」

「えっ！？　いや、何も考えてないよ？」

うわあ。読心術で見事に当ててくるから怖い。

「くだらない話はここまでだ。本題は、お前がどうしてここにいるかだ。しかも、上下ともに完璧なスーツ姿で」

「いやね、話せば長くなるんだよ千冬ちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶな！！　お前、私がこの歳にもなってまだそれで呼ぶのか！！」

僕が慣れ親しんだ呼び方を口にした途端、千冬ちゃんは烈火の如

く激昂した。

「いや、千冬ちゃん昔は許してくれたよね……？」

「昔はな！！あの頃はまだ私もお前も子供だった！！だが、今の私たちは成人だ！！それに、昔から私はちゃん付けで呼ばれるのは好きじゃない！！」

ああうう……。耳を両手で塞いでるのに、三判器官がまな板の上の鯛みたいに大暴れしてる。というか、体から直接脳に響いてる。

「い、ごめん……」

「まあいい。どうせ、お前のことだ。止めろと言っても直らないからな」

うわあ……。幼なじみだからって容赦がない辛辣な言葉。一般人が聞いたら、一瞬でトラウマになりそう。

「だが、これだけは守ってほしい。生徒や他の職員がいる前では、織斑先生と呼んでくれ。私と二人でいる時ぐらいは構わん」

「あつ、うん。分かったよ」

やっぱり、昔から変わってないなあ。千冬ちゃんはよく怒るけど、結局はそれなりに譲歩してくれる。

「そろそろ行くぞ。これ以上、学園長を待たせる訳にはいかん」

「あつ、ちょっと待ってよ！！」

そう言うと、千冬ちゃんは踵を返してそそくさと歩いていく。その後を、僕はすぐに追いかける。

（ほんとに、昔から変わってないなあ）

僕はそんなことをふと思い、思わず顔をほころばせた。

——春先であるのに、太陽は眩しいほどにさんさんと輝いていた。

幼なじみは遠慮なし

「全く……。お前は相変わらずだな。もう少し落ち着いた生活がでないのか？」

「いや、僕はただ良かれと思って……」

「それを落ち着きがないと言っているんだ。お前は誰もかれにも甘すぎる」

「あっ、うん……」

——今、僕は千冬ちゃんと並んで校舎内の廊下を歩いている。

昔話に花が咲く楽しい会話——なんかにはもちろんならないで、千冬ちゃんからお叱りを受けている。主に（というか九割方）、僕の性格の話だ。

「本当に、お前とあいつはよく似ている……」

「え？　今、何か言った？」

「独り言だ。それと、地獄耳になっている暇があるなら少しは改善したらどうだ？」

そう言う千冬ちゃんは、ハンターにも似た恐ろしく冷たい視線を僕に向けている。うん、これは絶対に怒ってる……。

「……ごめん千冬ちゃ……」

バシーン!!

普通に喋ったつもりがいきなり頭を何かで叩かれた。涙ぐみながら横目に見ると、千冬ちゃんの手には少し分厚い出席簿がある。

「さっき言ったばかりだ。織斑先生と呼べとな」

なぜか鈍器と差異がないあの得物（出席簿）をどこから取り出したのかすごく気になる。でも、聞いた瞬間にまた叩かれそう……。それと、平面で叩かれたはずなのにまだ痛い。

「……返事は？」

「は、はい!!」

千冬ちゃんがまたもや殺気立ち出席簿を構えて、僕はすぐに返事をした。

——そうこう世間話をしている内に、学園長室に到着した。

「私はここまでだ。仕事があるからな」

「あ、うん。ありがとう、千冬ちゃん」

「ふん」

千冬ちゃんは鼻を鳴らすと、踵を返して歩いていく。ああいう所も昔から変わらないなあ。

「――さて、と。ここからが、一番大変なんだ」

僕はネクタイを締め直してから、ドアを二回ノックする。

「どうぞ」

部屋の中からは穏やかな初老の男性の声が聞こえた。

「失礼します」

丁寧に重厚なドアを開けて、僕は部屋の中へと入る。

部屋の中には、総白髪で顔には歳相応のしわが刻まれている、優しさがにじみ出る初老の男性がいた。

「待っていましたよ、立花くん。それでは――話をしましょうか」

――そう言い、初老の男性は机に組んだ手を置くと鋭さすら感じさせる視線で僕を見据える。

影を背負うもの

「――ふむ。履歴書はお話を伺った通りのものですね」

「当たり前ですよ。僕は今まで、ただの平凡な人間として生きてたんですから」

「いやはや。当時の体制の杜撰さがよく分かりますね」

「仕方ないですよ。当時は、やっきになって探していたんですから。全員が全員、あの言葉を素直に受け止められません」

「それは確かに。やっきになっていれば、一つは見落としができるものですからね」

――僕は学園長室の来客用ソファに腰かけながら、僕の履歴書を読む学園長と話をしている。

学園長の本名は、轡木十蔵。このIS学園を運営している影の運営者。「影の」という意味は、表向きは轡木学園長の妻が務めていることになっているためだ。

「女尊男卑」の風潮のために男がするべきではない――ということではないと思われる。僕も轡木学園長の真意は計りかねない。

「とりあえず、最終試験は合格です。最終試験と言っても、履歴を確認するだけですがね」

轡木学園長はそう言うと、机の引き出しの中に僕の履歴書を片付

けた。

「いえ、僕の過去に何かしら不備があって仕事を続けるのは嫌ですから」

「おお、これは真面目で勤勉な日本人の鏡ですね」

「そんなにもおだてないでください」

「いやいや、その謙虚な心構えこそ今の男性に必要なですよ」

轡木学園長は嬉しそうに言いながら何度も頷いていた。

「ところで、立花くん。一つ聞きたいことがあるのだが、いいかね？」

「はい。何ですか？」

「――『彼女』が今、どこにいるか知りませんか？」

僕は質問を聞いた瞬間、背筋に嫌な寒気がした。まるで、服を着たまま背中に氷を入れられたかのような――。

「いえ、知りません。最近は全く会っていませんから」

「……そうですか。それは残念です」

轡木学園長は、さも残念そうに小さくため息を漏らすと机の上でまた手を組む。

「もし、何かあれば私に相談してください。力になりますよ」

「ありがとうございます。ですが、恐らく学園長のお世話にはならないと思います」

「確かにそうですね。それは私もそう思います」

その言葉には何か深い意味が感じられたが、僕はあえて聞かないことにした。

と、その時――。

コンコン。

――重厚な学園長室の扉が誰かによって再びノックされた。

無銘の名剣（アンノウン・ソード）

——重厚な学園長室の扉が、誰かによって再びノックされた。

「彼女も来てくれたようだ。入りたまえ」

「失礼します」

そう言っ僕と同じように入ってきたのは、一人の女の子だった。リボンの色を見ると二年生と分かる。第一印象からして、不思議な女の子だと感じた。

全体的に余裕があるものの、決して害があるものではなくどちらかと言うと親しみやすい——って、言ってる僕もよく分からない。簡単に言うと、不透明な存在。神話とかに出てくる存在——って言うと、ちよっとオーバーかな？

「こちらの方が、例の？」

「ああ、そうだ。お互いに自己紹介をすると良い」

「更識楯無です。二年生で生徒会長をしています」

轡木学園長から促されて、女の子——楯無さんが自己紹介をする。

「立花玲児です。よろしくね」

自分も挨拶を返すと、椅子から立ち上がり楯無さんに手を差し出す。

「こちらこそ、よろしく願います」

楯無さんは笑顔でそう言う。僕の手を握り返してくれる。

「更識くんには事情を伝えてあります。ですから、気兼ねすることなく相談してくださいね」

「ご配慮ありがとうございます。何から何まで、本当にすみません」

「いやいや、これも立花くんのためですよ。では、少し隣の部屋で待っていてくれますか？」

「分かりました」

何もすることがないために、僕は轡木学園長の言う通りに隣の部屋で待つことにした。

「――更識くん、彼をどう見ましたか？」

部屋に楯無と二人きりになった瞬間、十蔵は口を開いた。

「驚きました。あの歳になっているにも関わらず、どうして今まで

気付かれなかったのか。非常に疑問が残ります」

「うむ。それは私も同じ意見だ」

十蔵は何か考え込むように口の前で両手を組む。

「では、私が彼と同じく警護を？」

「すまないが頼みたい。状況が状況なのでね」

「分かりました。それでは、私はこれで」

楯無は十蔵に一礼だけをすると、足早に学園長室から出ていった。

一人部屋に残った十蔵は机から立ち上がり、窓から空を見上げた。

「一体、君は何を考えているのかね？」

十蔵は誰もいない空に向かって一人問いかけた。

——清々しいほどに澄みきった青空でさえも、その答えを出すことはなかった。

反りが合えば、馬も合う

——お昼時ともなると、校舎や中庭を問わず絶え間無く女の子たちの楽しそうな声が聞こえてくる。

そんな僕は、支給されたばかりの新品の作業衣を着て誰もいない屋上で一人座っていた。

屋上はきちんと整備され、綺麗な花の植えられた花壇があり石畳が敷かれている。……ここって、複合商業施設じゃないよね？

「なんだかなあ。ここにいと、学校だなんて思えなくなる」

貸し切り状態の屋上でしみじみと本音を漏らすと、用意していた昼食を取り出す。

用意していたと言っても、就任初日だからお弁当を作る暇もない。だから、お昼休みの少し前に購買で焼きそばとオレンジジュースを買ってきた。

その時、なぜか購買のお姉さんが僕を見た瞬間にタダに加えてオマケにパンも付けてくれると言ったけど断った。タダより高いものはないけど、やっぱり僕としては申し訳なかった。

「それじゃあ、いただきます」

両手を合わせて割り箸を両親指で挟んだまま食前の挨拶をする。

——とその時。

バン！！

屋上へと来るためのドアが乱暴に開かれた。

その音に驚いてドアの方へと振り向くと――。

「ハアハア……。あれ？　ここ、屋上か……？」

――男の子が一人、肩で息をしながら周りを見回していた。

「ん？」

すると、ようやく僕に気が付いて視線が合った。

「もしかして……一夏くん？」

「そういう貴方は……玲児さん？」

驚きのあまり、思わず僕と男の子は似たような質問をお互いにし
てしまう。

「玲児さん、どうしてこんなところにいるんですか？」

「そういう一夏くんだって、ここは女子校なのに何で？」

一夏くんが僕の所へ嬉しそうに小走りで走り寄ってくる。

「まあ、その……。俺、男なのにISを動かせるんですよ。だから、
保護するってことでここに入学することになったんです」

「そ、そうなんだ……」

「そういう玲児さんは、どうしてIS学園に？」

「えっ？ いや、僕はたいした理由じゃないんだけどね。たまたま学園長とお近づきになって、気に入ってもらえて用務員にさ」

「そうなんですか。いやあ、玲児さんがいてくれて本当に嬉しいですよ」

「僕も、一夏くんにまたあえて嬉しいよ」

——そんなこんなで、僕と一夏くんは屋上で一緒に話し込むことにした。

類は友を呼ぶ

「それで、結局は俺が賭けに負けたんですよ」

「そっかあ。それはついてないね」

「ついてないどころか、ごっそり取られましたよ」

——僕と一夏くんは、屋上に二人っきりで僕が買ってきた焼きそばと一緒に食べている。

「そういえば、千冬ちゃんがここにいるのは知ってる？」

「ええ、よく知ってますよ。俺の担任ですから……」

「そ、そうなんだ……」

想像するだけでも恐ろしい。身内だからといって、千冬ちゃんは確実に甘くしない。ううん、むしろ厳しい。

「玲児さんはどこで千冬姉と会ったんですか？」

「僕は、学園長に会いに行く途中でね」

「そうですか。あつ、箒には会いました？ あいつもここにいますよ」

「え？ 箒ちゃんもここに？」

「はい。しかも、同じクラスです」

「そっかぁ。良かったね、クラスの中に幼なじみがいてくれて」

「いやいや。あいつ、最近ずっと機嫌悪いんですよ。俺がISのことを全く知らないっていうのに、助けてくれなくて」

「うーん……。昔は、箒ちゃんも素直で可愛かったんだけどね」

「そうですか？ 俺には昔も今もあんな風に思えますけど」

「ほう？ では、あんな風とはどんな風なのだ？」

「「え？」」

一夏くんと二人で話していたのに、突如として頭上から凜として澄んだ声が降ってきた。

僕と一夏くんは嫌な予感がしつつも、恐る恐る振り返ると――そこには、篠ノ之箒ちゃんが腕を組み仁王立ちしていた。しかも、言葉で言い表せないほど恐ろしい剣幕になっている。

「ほ、箒……」

「ほ、箒ちゃん……」

僕たちは二人ともそんなことしか口に出来なかった。何でって、それはもう言い訳なんて出来っこないから。

「一夏も一夏だが、玲児さんも玲児さんですね」

箒ちゃんは酷く落ち着いた声で呟くように言うと、どこからともなく木刀を取り出した。

「待て、箒!! どっからそんなもん取り出した!!」

「その、話せば分かるから!!」

「話せば分かると言われれば、私の答えはただ一つ——問答無用!!」

「「ぎゃあああああ!!」」

「うう……」

「頭が……」

「ふんっ」

案の定、僕と一夏くんは箒ちゃんの制裁(?)を受ける羽目となった。

——いろいろな意味で、これからの生活が苦勞の連続だと思い知

ら
さ
れ
た
。

生きていくのも命懸け

「では、玲児さんもこれからはここに？」

「教師じゃなくて、用務員だけどね」

「そうなんですか」

今はもう機嫌も直って、僕と一夏くんの間に箒ちゃんを挟んで話をしている。……機嫌を直してもらうのに時間はかかったけど。

「それに、用務員室……というか、用務員棟に住み込みなんだよね」

「えっ！？ 玲児さん住み込みなんですか！？」

「うん、そうだけど？」

「お願いします！！ 玲児さんの所で寝させてください！！ 周りが女子ばかりでどうしようもないんです！！」

一夏くんはこれでもかと言わんばかりに頭を下げて合掌する。

「ああ、それなら僕も構わ——」

——僕は途中まで言いかけて飲み込んだ。

なぜかって——明らかに僕を睨んでる箒ちゃんが隣にいたから。その目は、『もし、今ここで承諾したら……』と確実に言っている。

「や、やっぱり無理かなあ……。その、用務員とは言っても学校の職員だから……」

「あゝ……。それもそうですよね」

一夏くんが落胆してうなだれると、なぜか箒ちゃんは静かに笑みを浮かべている。箒ちゃん、さすがに笑っちゃ可哀相だよ。

「まあ、二人とも何か困ったことがあったらいつでも来てね」

「分かりました」

「はい、頼りにさせてもらいます」

――陽も落ちかけ、夕暮れ時の少し涼しいそよ風が肌を撫でる。

そんな中、僕は宿舎代わりの用務員棟にいた。もちろん、ぐうたらししてる訳じゃなくて荷物整理をしている。

まだ越してきたばかりで、殺風景で何もない部屋に必要な家具を準備している。

すると――。

ピンポン。

——来客を知らせるチャイムが鳴り響いた。

まだ僕がここにいることは、少人数しか知らない。ドアを開けてみると——。

「……こんばんは」

——やっぱり一夏くんが玄関先に立っていた。

「どうしたの？ 一夏くん」

「ちょっと、直してほしいものがあるんです……」

「こ、これは……」

「さすがに、玲児さんも驚きますよね……」

僕と一夏くんが一緒に見ているものは、木製のドアにいくつも穴が空いている。

「一夏くん、これ誰がやったの……?」

「箒です……」

「ちなみに聞くんだけど、得物は……？」

「木刀です……」

——そうして、二人同時にため息を吐き出すと大きく肩を落とした。

世紀末の予感

「まさか、初出勤日でいきなり仕事をするだなんて思わなかった」

「いや、なんか本当にすいません。俺のせいで」

——僕と一夏くんは、一緒に穴の空いたドアを備品庫にあった新品のドアに取り替えている。運よく、事件の張本人の筭ちゃんはこの場にはいなかった。

「とりあえず、すぐに取り替えて僕は帰るよ。だって……ここは女の子たちが生活してるから」

「その方がいいです。そうじゃないと、今日の俺みたいに——」

一夏くんが何か言いかけたその時——。

「あれ？ 織斑くんがいる!!」

——あっぱれと言いたくなるほど素晴らしいタイミングで女の子に見付かった。

「えっ、織斑くん!? どこどこ!?」

「織斑くんの部屋を把握しておかなきゃ!!」

最初の女の子の一声で、全てのドアが開いて中から女の子たちが飛び出した。そうして僕らは、あっという間に女の子たちに取り囲まれた。

「あれ？ 織斑くんじゃない人もいる！！」

「えっ！？ ちょっと、あの人カッコイイ！！」

「すごい私のタイプ！！」

「あの、お名前聞かせてもらっても良いですか？」

まずい、とてつもなくまずい。女の子たちは一夏くんだけじゃなくて、僕にまで興味津々になってる。

「あっ、いや、その……」

この状況をどうにかしようとして一夏くんアイコンタクトをするものの――「無理です」と返ってきた。

だが、その時。

「お前たち静かにしろおッ！！」

この状況で一番聞きたくない人物の怒声が聞こえてきた。

その一声を号令として、取り囲んでいた女の子たちが一斉に壁を背にして縦一列に並んだ。

その人の道をたった一人の黒いスーツを着た人物が、腕を組んでこちらに歩いてくる。その様子はまさに――。

「「20XX年、世界は核の炎に包まれた」」

パンパンッ!!

「誰が世紀末伝説だ馬鹿者」

「はい、すみません……」

いや、さっきの千冬ちゃんを見た瞬間にいきなりオープニングの歌が流れてきたんだもん。一夏くんもそうみたいだし。

「——とりあえず、お前たちにはきっちり話をしないとなあ」

そう言うと、僕と一夏くんは千冬ちゃんに首根っこを引っつかまれて連れていかれる。

「えっ? 千冬ちゃん?」

「千冬姉?」

「——ただで帰れると思うなよ?」

——その時、僕ら二人は悪魔ではなく確かに魔王の姿が見えた。

理由のある暴力

「全く、一夏も一夏だ。ノックの一つも無しに女の部屋に入ってくるなどありえない」

明らかに憤慨した様子で、箒は腕を組みながら寮の廊下を歩いている。

「し、しかし……これからは一夏と一緒に寝食を共にすることになるのか」

そう考えた瞬間に、なぜか自然と笑みが零れてしまう。

「……ん？」

ようやく自分の部屋の前に戻ると、何やら人だかりが出来ていた。

「何かあったのか？」

「あっ、篠ノ之さん！ えっとね、ついさっき織斑くんと知らない男の人が織斑先生に連れていかれちゃって……」

「お、織斑先生に……！？」

（男の人は玲児さんとしても……嫌な予感がある）

「——という訳だ。本来は女子高で、お前たち二人が唯一の例外になっている。落ち着くまでむやみに歩き回るな。騒ぎが大きくなる」

——千冬ちゃんに連行(?) された僕たちは寮長室でお説教(?) を受けている。

「いや、それは分かってるんだけど……」

「むやみにつて、向こうから見つけてくる場合はどうすりゃ良いの? 」

「そんなこと私の知ったことか」

「「ええ」」

「何だ? 何か文句でもあるのか? 」

「「いいえ、意見など滅相もございません」」

……千冬ちゃん、出席簿を片手に言論弾圧は良くないよ。そんなことしても、いつか僕たちブルジョア階級が革命——は出来そうにないや。

「ともかく、無駄に騒ぎを大きくしないように努めろ。それと……何か用か? 篠ノ之」

千冬ちゃんが最後にドアに向かって声をかけると、箒ちゃんが罰

が悪そうに入ってきた。

「あの、織斑先生。一夏と玲児さんは、ただドアを直していただけで原因は……」

「ああ。私が注意していたのは、生徒に囲まれて騒がれていたことだ」

ピシッ。

……あれ？ 何だか空気が凍り付いたような。

「……そうですか。ありがとうございます、織斑先生」

なぜか箒ちゃんは、生気が無いようにゆらりと僕たちへゆっくり振り向く。

「ほ、箒ちゃん……？」

「お前、何か怒ってるのか……？」

「いいや、私は怒っていない。だから殺す」

そう言った箒ちゃんは、どこからともなく木刀をすらりと抜き出した。

「箒ちゃん、それ『十三組の十三人』の人殺しだよね!？」

「お前いつから『異常』になったんだ!？」

「天誅うううう!!」

——二人の男の悲鳴と犬の遠吠えが無常に夜空へと木霊した。

幼なじみの気兼ねさ

「あいたたた……。箒ちゃん、もう少し加減して欲しかった……」

「いい葉だ。それで少しは自重するようにつとめろ」

——箒ちゃんと一夏くんは一緒に部屋に戻っていったが、僕はまだ寮長室にいた。

「そんなこと言ったって……。っていうか、箒ちゃん何であんなにも怒ってたの？ 一夏くんならまだしも、僕にまで」

「さあな。自分の胸に手を当ててよく考えろ」

千冬ちゃんは素っ気なくそう言うと、ソファーに腰かけている僕に紅茶の入ったマグカップを差し出す。もう片方の手には自分の分のマグカップがある。

「ありがと、千冬ちゃん」

「お前はコーヒー派じゃないからな。紅茶ぐらいしかないぞ」

「大丈夫だよ。紅茶も好きだからさ」

正直なことを言うと、僕は日本茶が好きでその中でも玄米茶が大好き。あの煎った玄米の香ばしい香りが何ともたまらない。

「ああ、そうだ。あいつがクラス代表を決める戦いをする事になった」

「あいつって……一夏くんが？」

「ああ、そうだ」

千冬ちゃんはまた素っ気なく答えると、自分のコーヒーを静かに口にする。

「ってことは、それってすごい大事な模擬戦だよね？」

「そうなるな」

「でも……。その割には、千冬ちゃん。楽しそうだね」

「そういう気はないのだがな」

「いや、そういう意味じゃないよ。一夏くんが絶対に勝つって信じてる、っていう意味だよ」

「……どうだかな。もし、手が空いて暇なら見に行ってやってくれ」

千冬ちゃんはどことなくぶっきらぼうに言うと、また静かにコーヒーを飲み始める。

「一夏くん、あれから成長したよね」

「まあ、それなりにだがな」

「それなりかなあ？ 僕の目には大幅な成長だっと思うんだけど」

「目に見えて図体と態度がでかくなっただけだ。中身は何一つ変わっていない」

うわぁ……。姉弟で担任だからって、全く甘やかさないなぁ……。

「だがまぁ……。あいつの心意気ぐらいは買ってやるがな」

「そういうところ、やっぱり昔から変わらないね」

「う、うるさいな!!」

——春先の涼しげな夜風が流れる中、僕ら二人は久しぶりに昔話に花を咲かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5558w/>

IS <インフィニット・ストラトス> ～黒鉄の剣は誰がために～

2011年11月13日18時21分発行